

空^く工^うの魔法陣

斎藤 栄

下

もろびと下請であつて、
もろびと下請の事柄は、
生ずることも滅するともなく
それゆゑに、
空といふのもある



集英社文庫

くら まほうじん
空の魔法陣 (下)

昭和59年11月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

昭和61年11月25日 第5刷

著者 さいとう さかえ
齋藤 栄

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

(238) 2842 (編集)

電話 東京 (230) 6171 (販売)

(238) 2964 (製作)

印刷 大日本印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

集英社文庫

空の魔法陣

(下)

斎藤 栄



集英社版

目次

第十九章	雨台風上陸	七
第二十章	堤防大決壊	六
第二十一章	必死の救助	一〇七
第二十二章	石仏の哲学	一四八
第二十三章	玄米粥の謎	二〇〇
第二十四章	去りゆく人	二五三
第二十五章	犯人は誰か	二九八
終章	虹色の哲学	三五三

解説 影山荘一

空の魔法陣 (下)

ものが平等であつて差別のないことを空くうという。ものそれ自体の本質は、実体がなく、生ずることも、滅することもなく、それはことばでいい表わすことができないから、空くうというのである。

(仏教聖典より)

第十九章 雨台風上陸

1

午前六時に、千代子が目醒めたとき、雨風共に強くなっていた。テレビのニュースによると、台風20号は、時速四十キロにスピードをあげており、そのまま進めば、今夜半、南関東に上陸する虞れがあるという。

仮りに上陸しなくとも、20号は雨台風で、特に台風の北側に強い雨雲を伴っているため、関東地方の山沿いに、相当量の雨を降らせる可能性があるらしい。

南川病院の付近は、治水がよいので、風だけを気をつけるようにすればよかった。

「嫌だわ。台風が来るなんて……」

と、千代子は悪い予感に怯えた。

たとえば、台風が来ようと、相手からの呼び出しは厳然たる事実だ。台風だから中止にしようとはいえない。

台風の中心気圧は九百六十三ミリバールと、少し衰えては来たが、依然として大型の台風

であることには変わりなく、半径二百キロ以内では、風速
ている。

千代子は、初め、梶と二人で、東京から、毎朝の車
その後の調べでは、車の方が時間がかかるというし、
事故になると、約束に間に合わぬことになりそうなので、常盤橋を使うように変更した。
それから、台風の接近という異常事態の中に行くのは、いかに男の梶を同行させるといっ
ても、千代子は不安だった。

そこで、福田麻紀も連れて行くことを、自分だけで決めた。梶には断らなかつたのは、万
一、反対されると困るからである。

麻紀には、こっそりついて来てほしかったので、具体的な行動の点を、もう少し煮詰めて
おこうと思つた。

千代子は朝食の後、診療にはいる前に、麻紀と打合せるつもりだった。トーストに、ジャ
ム。飲み物はミルクの代りに、エリザニンという健康飲料をグラスいっぱい飲んだ。

そして、病棟の方にいる麻紀を、自分の部屋へ呼ぼうとしたとき、チャイムが鳴って、来
客があつた。

来客は、真部警部とその部下だった。千代子は、うっかりして、繁子の死体発見のニュー
スを知らないでいた。そのために、寿山とやまの事件か、夫の死にからんだことの聞き込みだろう
と思つた。

招じ入れた応接間で、真部はズバリと切り出した。

「……伊豆で、小林繁子さんという女の遺体が発見されたことを、ご存知ですか？」
「えっ」

千代子は愕然とした。小林繁子は何者であるか、彼女にはすぐに分かったのである。

「未だ、ご存知ないようですね。小林繁子さんは、八月末に秋田の実家を出られたきり、行方不明になっていたんです」

「……それがどうかしたのでしょうか？」

千代子は低い声で、抗議めいた言い方をした。

「つまり、殺されていたわけですがね。そこで、こちらにお尋ねしたいことがあるのです。被害者は、秋田から、ご主人を……亡くなったご主人に会うために上京して来ているのです。実家の母親の言葉では、こちらに訊いても、来られなかったという話ですが、本当でしょうか？」

真部は、じっと千代子を見詰めた。毛筋ほどの変化も、見逃がすまいという風であった。

「本当ですわ。全然……聞いたこともありませんけど……」

「おかしいですね」

「主人もそのことは何も……。もしかすると、主人一人が、私になにも話さず、内密に処理していたかもしれませんけど……」

これは、いわゆる死人に口なしで、責任を南川に転嫁する方法である。真部も、この一言

「そうすると、奥さまは、繁子さんとご主人のことはノータッチでしたか？」

「はい。主人は、一切、自分だけの一存でやっております。おそらく、私にあまり知られなくなかったのでしょう」

「そうですか」と、ひと呼吸おいた真部は、

「今日の午後、もう一度、こちらへ伺ってよろしいですか？」
と訊いた。

「構いませんが、私は留守ですわ」

「お出かけですか？」

「はい。プライベートな用事で」

「どちらまで？」

「……その……竜ヶ崎まで」

「すると、お帰りは？」

「今日中に戻れたら戻りますけど、ハッキリとは申せませんわ」

「車で行かれますか？」

「そうしたかったのですが、この台風でしょう。常磐線を使うつもりですの」

「なん時頃でしょう？」

「そこまで言わないといけませんか？」

「参考までに……」

「大体……」と、千代子は、わざとボカした。「五時半頃の電車にしますわ、上野を……」

「上野を五時半。すると、竜ヶ崎へは……」

「佐貫経由だと、なん時になりますかしら……」

千代子は、惚けた言い方をした。

2

真部達が帰った後、時刻表を前にして、しばらく考えていた千代子は、やがて胆を決めてから麻紀を呼んだ。

「……昨日、ちよっとお話ししたように、どうしても、今日、私と一緒に、竜ヶ崎へ行つて欲しいの」

と、千代子は言った。

麻紀は、顔の造作としては、少し大きい鼻を、くすんとひとつ鳴らすようにしてから、「台風が来ていますのよ。それでも、そんな場所へ行くんですか？」

と、不満気に言った。

「私だつて行きたくはないわよ。台風が来ていなくても……。でも、こんな手紙を貰ったら、放つてはおけないでしょう。だから、あなたに来てほしいわけ。毎朝新聞の梶さんを頼んであるけど、あの人は、あくまでも新聞記者よ。記者として、何かつかめると思うから来るだ

「けよ。どこまでアテになるか、それは分からないでしょう……」

千代子は、熱っぽく麻紀に言った。

「でも……別々に行くことになるんでしょう？」

「そうよ。私と梶さんを、あなたは遠くで見えてくれればいいの。いくらなんでも、梶さんが大丈夫というのに、あなたを堂々と連れて行けないし、さりとて、あの人と二人きりではね……。さっきも言ったように、記者というのは、結局、取材が狙いになるから……」

「分かりました。そうしますけど……」

「……………」

「ただついに行くにしても、いざというとき、相談はできないし、その点は、いつまでどんな風に、ということをお教えて下さい」

「とにかく……たとえば私達がタクシーに乗ったら、すぐ続いて後をつけるといふ風にするのよ。もちろん、私がうまくやって、あなたが尾行できるようにするわ」

「じゃ、変装してみようかな」

やっと、麻紀は笑いを浮べた。笑うと、眼のまわりに、年齢としにしては多い皺しわが寄った。

「サングラスと……かつらぐらいなら、あるでしょう。ありあわせでいいのよ」

「乗車時間はいつに決まりましたか？」

「これから梶さんと打合せて、あなたに教えるわ」

「はい」

「あら、随分、風が強くなって来たわね」

フト、千代子は窓の外へ目をやって、眉を曇らせた。

「雨もあんなに……」

麻紀も言った。

台風は、どうやら、夕刻にでも、関東地方にもっとも接近する様子だ。

〈向こうへ行っても、帰りのアシがなくなるかもしれない〉

と、千代子は覚悟した。

一番心配なのは、こちらが折角、行ったのに、犯人の側でそれをすっぱかすことだ。今度の犯人は、マリントワー以来、そうした癖のあることをみせている。ムダ足になるのは嫌であつた。

〈帰りが明日になることも考えないと……〉

千代子は、渋谷医師の顔を思い浮べた。よくても悪くても、こうなると、自分の留守中は、彼に病院の采配をまかせるしかないのだつた。

3

千代子は病院の院長室へ出向き、その大きな牛革製の回転椅子に、どっかかり腰をおろした。この回転椅子の坐り心地はよかつた。特に、他人ひとに命令するときや、見栄を張るときなどに、そこから喋ると、普段より偉そうな気になれるのは、不思議なくらいであつた。背も

たれの高いその椅子は、千代子をひとまわり大きく見せる効果を生むのだ。

渋谷を呼びつけようと思つた千代子は、すぐに、この椅子に坐り、相手を小さなポップアップチェアに腰かけさせる構図をあたまに描いた。

南川が死亡した今、こうした演出までが、千代子にとっては重要な仕事になっていた。彼女は、院長であり、唯一人の病院経営者として、毅然たる態度で、すべてに臨まなくてはならないのだ。

千代子は、インターホンで、医局にいるはずの渋谷を呼んだ。呼ばれた渋谷は、なん分も経たずに、院長室にはいつて来た。

ほんの少し猫背で、白衣の背が丸く盛りあがつたように見える渋谷は、その白髪と共に、ひどく老けた印象を、見る者に与えた。

「早くそのドアを閉めて、ここへお坐りなさい」
入口のところで、老眼鏡の縁に手をかけたまま、
「なんのご用ですか？」

と言いたげに、もぞもぞしている老人を見ると、千代子はつい、邪険な言い方になってしまふ。

「へこんな年寄りを頼りにしなければならぬなんて、情ないわ」
彼女は内心で零した。

「はい」

渋谷は、かしまった態度で、ぺこりと頭をさげると、院長席の大テーブルの前に、置いてあった貧弱なポップアップチェアに坐った。

「あなたに留守の間、この病院のことをお願いしなけりゃならないのよ。私、これから出かけるから……」

と、千代子は、わざと感情をできるだけ抑えた声で言った。

「どちらへ？」

「竜ヶ崎よ。あなたには正直に話しておくわね。でも、誰にも言ったらダメよ。竜ヶ崎の喫茶店へエコー」というところ……。午後七時にそこで……」千代子はじっと渋谷の表情を見詰めた。「……多分、あの……犯人が待っているはずなの」

渋谷の顔色が明らかに変わった。

「呼び出されたのですか？」

「そうよ。行ってみるわ。挑戦されて、このまま引っ込んでいることはないでしょ。悪戯いたづらかも分からないけれど、その辺は五分五分よ。でも行くと決めたのよ」

「危険じゃないでしょうか？」

と、渋谷は引き留めるように言った。

「承知よ。だから、毎朝の梶という新聞記者と、福田先生について行ってもらうわ。そんなわけで、病院の方、あなたにお願いせざるをえないの」

「今夜は、帰れないんですか？」